会長就任に当って

永田　年

私は今回はからずも，会員各位の推挙により，会長に就任いたすことに相成りました。

当学会はわが国土木技術の最高指導機関でありますから，私は常に当学会に多大の関心をよせていたのでありますが，私は学者ではありませんし，学会などとは縁遠い存在なのであります。従って今回の重大な責務にいささかとまどっている次第であります。しかし，学会運営に練達の副会長，理事各位ならびに会員各位の御協力を得て，この重責を果たしたいと存じます。

今日わが国の土木事業は，例えば道路，鉄道，河川，港湾などいずれの工種においても，戦前，戦後を通じて最大の事業量であるばかりでなく，その一つ一つの工事規模もきわめて大きく，学問的にも，施工技術の面においても，土木技術の発展に最良の時代であると，私は判断いたしているのであります。

現在わが国の土木技術は，どちらかといえば，学問の領域において高度に発達，普及し，その一般的水準は欧米の一流国に劣るものではありません。ここ数年間における眼をみはるような施工技術の進展は，この高い技術の潜在していたことを示すものであります。最近完成しつつある高速道路，大規模のダムなどいずれも，世界一流と言ってもいいすぎではありません。目下工事中の国鉄新幹線にも多大の期待がよせられるのであります。しかし一般的にみて，大規模工事が少なかったため，経験に乏しく，労務能力，労務賃金，施工機種の選定と運用，施工施設などの間に間げきがあって，最高能率，最低コストを発揮するに至っていないと私は考えています。しかしここしばらく，研究にはげみ，経験を重ねるならばわが国の土木技術は異常な躍進をとげるものと私は信じて疑わないのであります。

他面土木事業は政治の一部であります。技術自体はいかにすぐれていても，時期尚早であれば，ぼう大な土木費は国内経済の発展を阻害し，悪くすると，立派な舗装道路が縦横に走る後進国ともなり兼ねないのであります。社会の思潮と経済状勢の現在と将来を見越し，適切な事業計画を樹立することは，土木技術者にかせられた宿命でもあり，また技術としての土木が高く評価され，世に注目される所以でもあります。

今日われわれはぼう大な土木事業に直面して，技術的には，数多くの研究と経験は必然的に高踏な理論を生み，行政的ともあるいは人的ともいえましようが，これは，大事業の経験により，内にわれわれの見識を広め，外にはわれわれの地位を高めたいものであります。

私はその基礎に立って，当学会の発展を会員各位とともに念頭してやまないのであります。